

追弔を憶つ

本徳寺の境内には、戦歿追悼記念碑が少なからず建立され、日清・日露戦争、日支事変、と戦争の惨劇が刻印されています。(写真中央)

二十世紀、この文明社会の秩序形成にあたってヨーロッパでアジアで、人類史上例を見ないおびただしい数の「いのち」が犠牲になりました。前世紀は近代国家の利害がぶつかり合うなかで、戦闘員、非戦闘員を問わず無差別大量殺戮の始まった世紀であったことに気づかされます。

夏になると全国で繰返される戦没者追弔会では犠牲者の冥福を祈り、今の平和を築いた礎として感謝の誠を捧げることが定着してきました。しかし、定着は形骸化し、戦後体制の正当化にすり替えられつつあります。

人の祈念する平和は移ろいやすく不安定なものです。人のつくる平和はその中に戦争の種を宿し、恐怖と傲慢によつて発芽します。一度戦争になれば、その耐え難い悲惨は反戦への強い反動を呼び起こします。戦争の悲惨と恐怖に裏打ちされた平和の虚像は人類が歴史を刻み初めて以来幾度となく繰返されてきた事実ではないでしょうか。

人間社会の安定を考える上で、「貧」「病」「争」はいつの時代も社会の関心事です。戦後の日本では、幸運にも、戦後経済の復興、医療・福祉の整備、法治国家の成熟によつて、これらの危機は目の前からなくなり、巷では「物」から「心」の時代へと、ピントはずれのキヤッチフレーズが横行するほどになりました。

しかし、一見豊かになった日本社会もその内部に目を凝らすと、若者の死因のトップが自殺、

認定自殺者数は年間三万人、変死者を含めると十八万になります。この事実からも異常な社会の実体が見えてきます。大量の物の生産と消費の中、平和のカモフラージュの下で、非戦闘時にも関わらず大量の「いのち」が消費されていく現実を見せつけられます。東の間の大衆消費社会に閉じこもった国民と政府はアジア諸国との間に積極的な展開を見いだせず、孤立する日本経済の前途はそう明るいものではありません。戦後の一時の平和で豊かな経済はさらなる大惨劇の幕間にしか過ぎなかったのかも知れません。



世界に眼をやると南北間の絶望的な経済格差、貧

困であるが故の人口爆発、そこには将来に夢を描けない多くの若者が出現し、やがてテロリズムへとつながる状況があります。先進地域では生産人口の減少によつて、「老」「病」「死」と常に向かい合う高齢社会が出現し、未知の経験が始まりました。経済のグローバル化に伴って、国家間の敷居が下がり、貧しい国から豊かな国に人は当然押し寄せます。そこには未だかつてない個人の緊張が生じます。先進地域での一時的な「貧」「病」「争」の解消と引き替えに、文明社会の本質的矛盾が世界規模に拡大再生産されて来たことが分かります。

自己犠牲が美德ではなくなったこの時代、この社会

は、全能感の肥大化と他をかえりみる想像力の欠如によつて、万人の万人に対する戦いの修羅場と化してしまうのでしょうか。冷静に近代という激動の世紀を眺めてみると、戦前も戦中も、そして戦後もこの人間の本質はいつこうに変わっていないのに驚かされます。ご仏前にて、縁有る犠牲者に追悼の誠を捧げるとき、不完全な文化や価値観をもってしか生きる事が出来きない人間の宿業的な問題を意識せざるを得ません。自縛の苦惱地獄が始まつてから、法蔵菩薩が終始問題とされ、その解決のために阿弥陀仏となられたことを今一度深く考えてみたいと思います。

さて、過去に多くの世話方が、この本徳寺を支えて下さいました。これらお世話方の報恩行は、人間の宿業の解決こそが、人間として本当にしあわせになることであること、その為には「私」が仏様から願われている存在であることに気づくしかないと、身をもつて示されたものであります。

平成一四年度まで戦没者と物故世話役の追弔法要を勤めさせていただいておりましたが、戦後半世紀を過ぎご遺族の老齢化が進み参加数も少なくなりました。この法要に参加される方は真宗門徒にかぎられていたこともあつて、五年前から、生前中お取り次ぎ頂いた本徳寺のお世話役と本徳寺にご縁のあつたご門徒のご苦勞を忍ぶために播州一円の物故門徒の追弔法要を勤めさせていただいております。そして、平成一九年度からは、本徳寺の廟所の総墓や個人墓に納骨された方へのご案内もさせていただき、真宗の教えを多くの人に知っていただくと思ひます。この上は、先達の法義相続と寺門繁盛の志に思いを致し、先達の「いのち」に正面から向かい合うことを通して、終始仏様が願いをかけ手を合わせておられる我が「いのち」の宿縁に気づかせていただければ有り難いことでありませう。

つきましては、九月三日・日曜日・午後一時から亀山本徳寺本堂にて「播州真宗門徒追弔法要」を勤修いたします。ご縁のあるご門徒・お世話役に左記追弔法要のご案内をさせていただきます。

大谷昭仁